

母袋俊也

Toshiya MOTAI

母袋俊也 〈絵画のための見晴らし小屋〉1999～2016

——絵画原理にむけて拓かれた窓を有す視覚体験装置、その構想と構造

Toshiya MOTAI 〈Prospect Cottage for Painting〉 1999～2016

本研究が対象とする〈絵画のための見晴らし小屋〉系作品は絵画制作者である筆者のメインテーマ「絵画における精神性とフォーマット」のもと制作している絵画作品と並行し展開してきている制作研究である。本研究は〈絵画のための見晴らし小屋〉系作品のまとめと考察であり、「絵画」および「絵画性」をめぐる研究論文のひとつとして位置づけられるものである。

〈絵画のための見晴らし小屋〉は1999年のFUJINO国際アートシンポジウムへの参加に際し制作した《絵画のための見晴らし小屋》第一作以降、立地の特性に呼応するサイトスペシフィックな野外作品として継続的に制作されてきた。小暗室壁面に切り取られた様々なフォーマットの窓は、その折々の光と季節の現象を捉え、その定点観察取材を経て〈TA系〉絵画が連動して制作されていくことになる。

また「〔視点と見られる対象〕の中間に〔窓＝枠〕を設置する視覚体験装置」としての〈絵画のための見晴らし小屋〉は小屋形状に留まらず、直方体の2面に視点穴と窓を持つ〈絵画のための垂直箱窓〉、木枠状の〈枠窓〉、ガラス面にテープ貼付の〈膜窓〉、〈視点板+膜窓〉、〈ヤコブの梯子〉などと形態も異なる作品群として拡張、野外および室内で展開してきている。

本研究論文『《絵画のための見晴らし小屋 1999～2016》—絵画原理にむけて開かれた窓を有す視覚体験装置、その構想と構造』は、2004年に纏めた先行研究『《絵画のための見晴らし小屋 1999～2004》—絵画原理にむけて開いた窓を有す視覚体験装置、その構想・構造と展開—』の継続研究として、1999年から2016年までに制作された全〈絵画のための見晴らし小屋〉系作品、全74作をその対象とした。

以下の課題が本研究によって照射される。

- ・〈絵画のための見晴らし小屋〉系作品と〈絵画〉作品の連動制作における「像」の循環性と積層性。
- ・〈絵画のための見晴らし小屋〉系作品に見出す「視点」—「窓＝枠」—「対象」構造。
- ・「絵画の現出する場」に対する考察。「窓・絵画」が捉えようとするその対象の世界、そしてその世界と対面する私（＝主体）との中間に絵画の現出する領域がある。

主体→〔窓・絵画〕→対象 主体—〔絵画・中

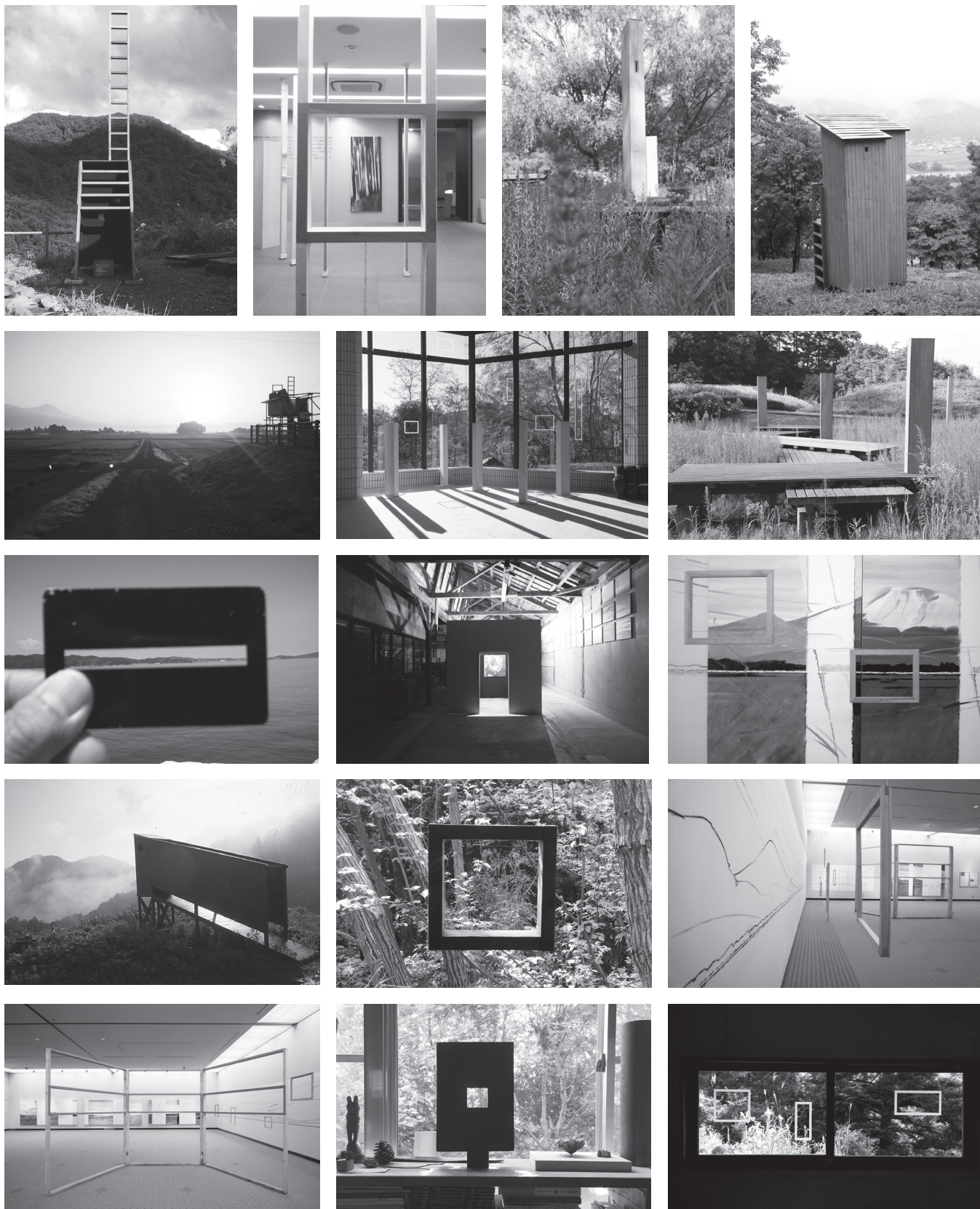
間領域〕—対象—その相関関係。さらに絵画が現前化を果たそうとするその中間領域としての場の考察。

- ・「窓＝枠」越しで対象を見ることによって実体ある対象は「膜状の像」として捉え直され、「像として見る」という自覚は対象を客観的かつ疑いを持って見ること、加えて見ることそのものへの問いを発生させることになる。この「Bild Akt=像行為」に絵画の本質と機能を見出す。
- ・絵画を窓として捉えようとしたアルベルティ「絵画論」その透明性の今日的意味とライブニッツ「モノダ論」の検証考察。
- ・視点の固定を前提とした異方性に支えられる自明の「絵画の正面性および平面性」理論への問い直し。
- ・異方性／等方性の観点からの絵画考察、および主客の二分法の見直し。
- ・「風景」の今日的意味。モダニズム絵画の文脈およびロマン主義の文脈からの検証。
- ・客体としてある「風景」観の再考。

1. 目次

2. 〈絵画のための見晴らし小屋〉1999～2016
3. 〈絵画のための見晴らし小屋〉—経緯、展開
4. 〈絵画のための見晴らし小屋〉—視覚体験装置としての構造
 - ・シェーマ「視点」+「窓」+「対象」
5. 〈絵画のための見晴らし小屋〉系 系統図
6. 〈絵画のための見晴らし小屋〉系 系列作品全リスト
7. 〈絵画のための見晴らし小屋〉系作品 概要と絵画との相関
 - 7-1 〈絵画のための見晴らし小屋〉—野外設営
 - 7-2 〈絵画のための見晴らし小屋〉系室内装置
 - 7-3 〈再生プロジェクト・絵画のための見晴らし小屋〉
 - 7-4 〈絵画のための垂直箱窓〉
 - 7-5 〈絵画のための見晴らしデッキ〉
 - 7-6 〈ヤコブの梯子〉
 - 7-7 〈箱窓〉
 - 7-8 〈視点板+膜窓〉
 - 7-9 〈膜窓〉
 - 7-10 〈枠窓〉〈柱窓〉
 - 7-11 〈絵画のための見晴らしフレーム〉
8. 〈絵画のための見晴らし小屋〉系全作（時系列）
9. 略歴
 - ・個展・特集展示
 - ・グループ展
 - ・研究論文
 - ・論文・書評

2. 〈絵画のための見晴らし小屋〉 1999～2016



3. 〈絵画のための見晴らし小屋〉— 経緯、展開 —

1999年、野外展参加に際して、さまざまなフォーマットで切り取った窓を設けた小屋が制作された。風景をその切り取られた窓を通して膜状化された「像」として改めて直観する視覚体験装置は《絵画のための見晴らし小屋》と名づけられ、その第一作以来、〈絵画のための見晴らし小屋〉はさまざまな場でサイトスペシフィックな試みの実践としてそれぞれの場所の特性のもと展開してきている。

窓々は、その折々の光と季節の現象を捉え、〈絵画のための見晴らし小屋〉は定点観察の場となり、それに基づいて絵画の制作が始まる。〈絵画のための見晴らし小屋〉シリーズ（註1）は、観察取材を経て制作される〈TA系〉絵画と連動して展開していくことになる。

また〈絵画のための見晴らし小屋〉シリーズの展開の過程で、室内への設置、またその対象も風景に留まらず絵画作品の部分へと拡張し、構造上でも、直方体の2面に視点穴と窓を設けた〈絵画のための垂直箱窓〉、木枠のフレームを浮かせた〈枠窓〉、ガラス面にテープで矩形を張り込んだ〈膜窓〉、〈ヤコブの梯子〉、〈視点板+膜窓〉など〈絵画のための見晴らし小屋〉系作品は多くのシリーズとして展開されてきている。

4. 〈絵画のための見晴らし小屋〉— 視覚体験装置としての構造 —

対象を「窓・枠」越しに見ることをとおして、実体ある対象は「薄い膜状の平板な像」として捉え直される。実体は枠体験をとおして膜状化され「像」へと変換されたのである。この視覚体験は「観ること／見えること」の意味の覚醒を促し、「実体／像」「リアル／リアリティ」の相関そして対象の本質を表出させる。

〈絵画のための見晴らし小屋〉＝「視点+窓+対象」による視覚体験装置

●シェーマ「視点」+「窓」+「対象」

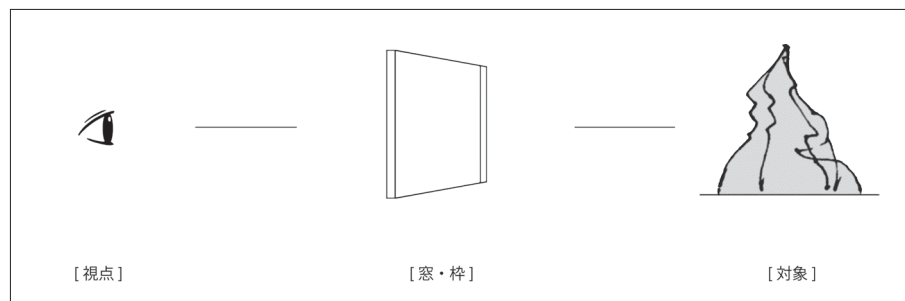


図1 「視点—窓—対象」

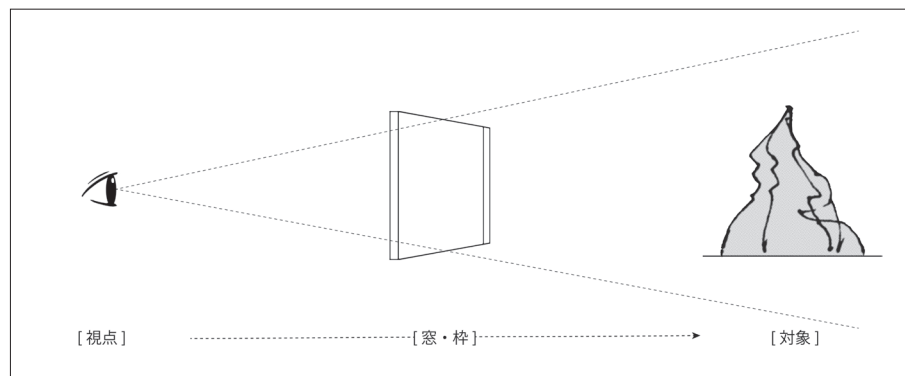


図2 「視点→窓→対象」

註1 〈絵画のための見晴らし小屋〉シリーズ
〈絵画のための見晴らし小屋〉の生成、経緯、構造は『絵画のための見晴らし小屋1999—2004』（p.65～97）東京造形大学研究報2005に詳しい。

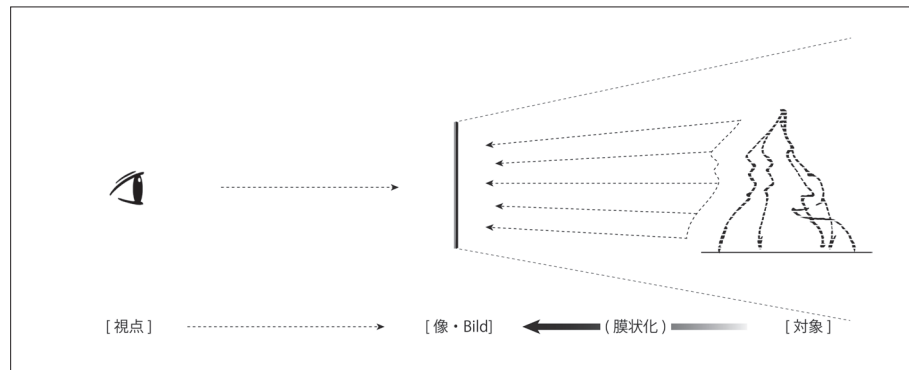
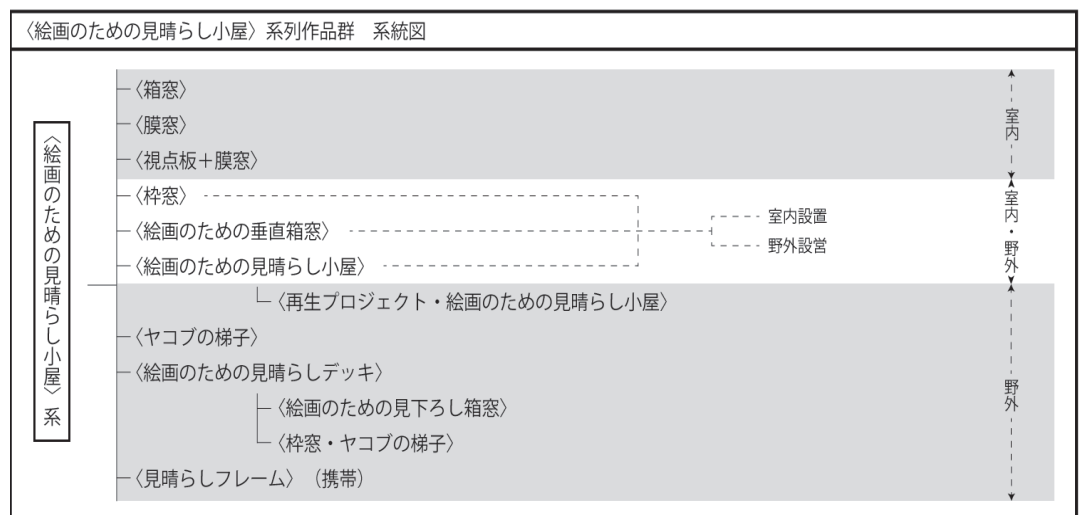


図3 「視点→像←(膜状化)←対象」

5. 〈絵画のための見晴らし小屋〉系 系統図



6. 〈絵画のための見晴らし小屋〉系 系列作品全リスト

- ◆ 〈絵画のための見晴らし小屋〉ー野外
 - ・《絵画のための見晴らし小屋》1999
 - ・《絵画のための見晴らし小屋・bei Atelier》2002
 - ・《絵画のための見晴らし小屋・芸術の家》2002
 - ・《絵画のための見晴らし小屋・妻有》2003
 - ・《絵画のための見晴らし小屋・Hillside》2004
 - ・《絵画のための見晴らし小屋・荒神山》2007
 - ・《仮構・絵画のための見晴らし小屋KOMORO》2013
- ◆ 〈再生プロジェクト・絵画のための見晴らし小屋〉
 - ・《再生プロジェクト・絵画のための見晴らし小屋》1999/2010
 - ・《再生プロジェクト・絵画のための見晴らし小屋・芸術の家》2002/2010～
- ◆ 〈絵画のための見晴らし小屋〉系室内装置
 - ・《フォーマット／Project絵画のための見晴らし小屋展》2000

- ・《遮蔽壁／TA・MA UNOU HI展》2001
- ・《小暗室／magio fujino》2001
- ・《絵画のための見晴らし小屋・MOMAS》2006
- ・《絵画のための見晴らし小屋・Yoshikawa-kaede》2007
- ・《絵画のための見晴らし小屋・Yoshikawa-sugi》2007
- ・《絵画のための見晴らし小屋・KYOBASHI I》2008
- ・《絵画のための見晴らし小屋・KYOBASHI II》2008
- ・《仮設壁なつか》2011
- ・《小屋・現出の場》2013（AP青梅）

◆ 〈絵画のための垂直箱窓〉

- ・《絵画のための垂直箱窓・FUKUSHIMA 1》2012
- ・《絵画のための垂直箱窓・FUKUSHIMA 2》2012
- ・《絵画のための垂直箱窓・FUKUSHIMA 3》2012
- ・《絵画のための垂直箱窓・FUKUSHIMA 4》2012
- ・《絵画のための垂直箱窓・FUKUSHIMA－水平》2012
- ・《絵画のための垂直箱窓・青梅1》2012
- ・《絵画のための垂直箱窓・青梅2》2012
- ・《絵画のための垂直箱窓・青梅3》2012
- ・《絵画のための垂直箱窓・青梅4》2012
- ・《絵画のための垂直箱窓・青梅5》2012
- ・《絵画のための垂直箱窓・青梅－水平1》2012
- ・《絵画のための垂直箱窓・青梅－水平2》2012
- ・《絵画のための垂直箱窓・青梅－M303・アルカーブ》2012
- ・《絵画のための垂直箱窓・美作 1》2016
- ・《絵画のための垂直箱窓・美作 2》2016
- ・《絵画のための垂直箱窓・美作－水平》2016

◆ 〈絵画のための見晴らしデッキ〉2014

- ・《絵画のための見下ろし箱窓・FUKUSHIMA 1》2014
- ・《絵画のための見下ろし箱窓・FUKUSHIMA 2》2014
- ・《枠窓・ヤコブの梯子》2014
- ・《枠窓・磐梯山》2014

◆ 〈ヤコブの梯子〉

- ・《ヤコブの梯子・青梅》2015
- ・《ヤコブの梯子・藤野》2015
- ・《ヤコブの梯子・藤野 やまなみ》2017

◆ 〈箱窓〉

- ・《箱窓》2000
- ・《箱窓・モネ／白羊》2006
- ・《箱窓・水平／全面》2006

◆ 〈視点板＋膜窓〉

- ・《視点板・Yoshikawa》2007

・《視点板・Kyobashi》2008

◆〈膜窓〉

- ・《膜窓・正方形-MOMAS》2006
- ・《膜窓・垂直-MOMAS》2006
- ・《ガラスケース膜窓・御舟：恒友－掛け軸》2006
- ・《ガラスケース膜窓・雅邦－屏風》2006
- ・《のぞきケース膜窓・雅邦－Waage》2006
- ・《膜窓・アートラボはしもと1～12》2012
- ・《膜窓・青梅》2012
- ・《膜窓・藤野アトリエ》2012
- ・《膜窓・FUKUSHIMA1～12》2014
- ・《膜窓・小諸1～3》2014
- ・《膜窓・BC》2015
- ・《膜窓・MSK1～15》2016

◆〈枠窓〉〈柱窓〉

- ・《柱窓・枠窓 アートラボはしもと》2012
- ・《枠窓・藤野アトリエ》2013
- ・《枠窓・小諸1～6》2014
- ・《枠窓・青梅1～5》2014

◆〈絵画のための見晴らしフレーム〉

- ・《絵画のための見晴らしフレーム》2003
- ・《絵画のための見晴らしフレーム》2004

7. 〈絵画のための見晴らし小屋〉系作品 概要と絵画との関係

〈絵画のための見晴らし小屋〉系作品—〈TA系〉〈パーティカル〉絵画

「視点＋見られる対象」の中間に「窓＝枠」を設置する視覚体験装置〈絵画のための見晴らし小屋〉第一作《絵画のための見晴らし小屋》(7-1-1)は、1999年のFUJINO国際アートシンポジウムで制作された。暗い室の中、様々なフォーマットに切り取られた窓は、その折々の光と季節の現象、形姿を捉えていくことになった。定点観察の場としての〈絵画のための見晴らし小屋〉での観察取材をもとに、翌年には《M286 magino1》《M287 magino2》《M288 magino3》の縦長、横長、正方形の絵画作品が制作された。第一作以後〈絵画のための見晴らし小屋〉は、立地の特性に呼応する野外作品として継続的に制作され、その多くの場合にはその窓をモデルに絵画が制作されていくこととなる。風景と地平線の関係からか横長フォーマット〈TA系〉制作が多いのだが、《絵画のための垂直箱窓FUKUSHIMA1～4》の場合は縦長の窓が開けられ、後に縦長フォーマット〈パーティカル〉の作品が制作された。





● 〈絵画のための見晴らし小屋〉野外設営と〈TA系〉絵画との相関

- ・《絵画のための見晴らし小屋》1999—絵画《M286 magino1》《M287 magino2》《M288 magino3》2000
- ・《絵画のための見晴らし小屋・bei Atelier》2002—
- ・《絵画のための見晴らし小屋・芸術の家》2002—
- ・《絵画のための見晴らし小屋・妻有》2003—絵画《M338 TA・TSUMAALI》2004
- ・《絵画のための見晴らし小屋・Hilside》2004—絵画《M339 Tsumari1》2004
- ・《絵画のための見晴らし小屋・荒神山》2007—絵画《M362 TA・KOHJINYAMA》
《M363 Kohjinyama1》《M364 Kohjinyama2》2006
- ・《仮構・絵画のための見晴らし小屋 KOMORO》2013—絵画《M503 TA・KO MO RO》2014

※《絵画のための見晴らし小屋・Hilside》(2004年)はギャラリー外部に設置、ガラス越しに展示会場内の展示絵画《TA・TSUMAALI》を捉え

7-1 〈絵画のための見晴らし小屋〉—野外設営—

7-1-1 《絵画のための見晴らし小屋》1999



332.5×95.5×600cm (窓8)
木造+コンクリート基礎+ガルバリウム鋼板

1999年、Fujino国際アートシンポジウムに際して、隆起に富む地形の中、山の中腹部、葛などの野草の生い茂る造成地跡に視覚装置の建造物を制作設営する。

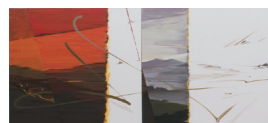
北には遠く奥多摩、陣馬山などの山の稜線が続いている。その水平の揺れのリズムは、正面壁の横長フォーマットの窓によって切り取られ、中景の山肌の色彩は正方形フォーマットで、近景地面近くの草の表情は、小さな正方形の窓によって切り取られ、右壁では「一本杉」の伸長感を縦長フォーマットでのカットアップが試みられた。

この様な様々なフォーマットの窓をとおして外界と交感する小暗室、そこに至るアプローチ、にじり口の構造区分を備えたこの第1作《絵画のための見晴らし小屋》は、フォーマットと視線の相関、その視覚的対象との関係、原理、即ち絵画の本質的原理を野外作品によって検証、探究していく〈絵画のための見晴らし小屋〉系作品の原型となり展開されていく事となる。



絵画との相関

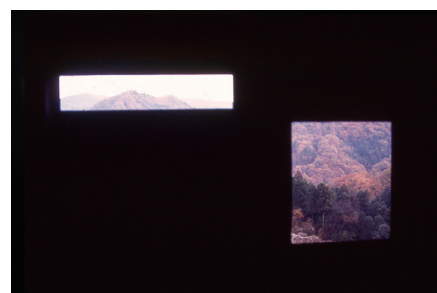
—絵画《M286 magino1》《M287 magino2》《M288 magino3》



《M286 magino1》125×603cm (4枚組)
2000年

《M287 magino2》
260×70cm
260×30cm
2000年

《M288 magino3》
160×160cm
2000年



7-1-2 《絵画のための見晴らし小屋・bei Atelier》2002



345×216×176cm (窓4)、225×200×108cm (窓5)、2棟回遊式
木造+コンクリート基礎

期には無限の緑の調子の幅を、また冬期にはグレーの空を背景に力強い素描性を示す枝のコンポジションをカットアップしている。

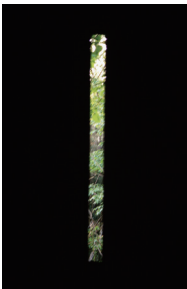
この第2作目では、二つの小暗室に、三つの視点場が設けられ、そこを移動する回遊性、下降するアプローチなど、新たに試みられた新作は、タイトルにbei Atelier（アトリエの脇の独語）が付記され前作との差別化がはかられた。

《絵画のための見晴らし小屋》第2作目。

自宅アトリエ脇に隣接した3棟を建設、回遊しながら計9個のフォーマットの窓を体験する構造。

外観の異なった2棟の小暗室を持った、《絵画のための見晴らし小屋・bei Atelier》は、2002年アトリエ脇の急斜面の法地に制作設営された。

アトリエのドア付近から始まるアプローチは、まずは水平に敷かれた板を移動、次に5段の階段を下り、第1の小暗室入口に設けられた柵の上板をはね上げるかたちで入室する。ここでのアプローチは、下降方向にGL（グラウンドライン）点とフロアラインが結ばれている。入口の柵は椅子でもあり、そこを視点場に、正面の縦長に切り取られた窓をとおして、繁茂する緑の視覚体験を終え、前にすすみ方位を左へと変える。そこに設置された椅子から二つの窓を臨み更に方位を変え、にじり口をくぐり外のデッキ部へ。そして高さを抑えられた鋭角の小暗室へ。ここでの椅子は寝椅子型で窓は屋根面に設けられ、頭上に広がる木々の葉や空に開かれており、夏



7-1-3 《絵画のための見晴らし小屋・芸術の家》2002



《絵画のための見晴らし小屋》第3作目。

工房と宿泊施設のある藤野芸術の家で開催された絵画のワークショップのために、変形の五角柱の様な《絵画のための見晴らし小屋》が制作された。

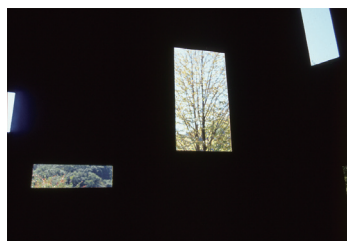
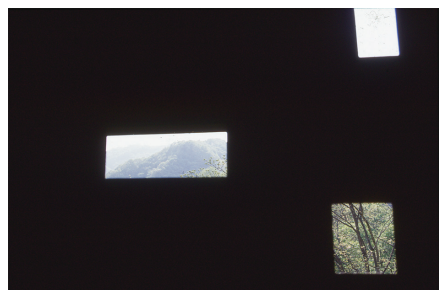
すり鉢状の地形の南斜面にG L（グランドライン）点を設定し、上方に視点場が宙に浮く様に建ち、大きな銀杏と背後の山にむけてフォーマットの窓を開く事が構想され制作された。

視点場である小暗室はアプローチの起点・G L点の真上に設定され、梯子を一段一段と登る完全な垂直移動により視点場であるフロアラインまで到達する。

床面は五角形で、設定された椅子からの視野には、正面壁二面が、横長に拡がり、幾つかのフォーマットの窓が、視線を受け留めるようにしている。視界を扇状に拡げるために二面を必要としたのだが、視線と直角に連結しない壁面上のフォーマットは、視覚上のフォーマットとは異なり、大きなゆがみをつくり出す事になった。

大きいやや縦長のフォーマットの窓が対象化した銀杏は、夏から秋にかけて劇的に変化をとげ、緑一色の面は徐々に暖色味を帯び、黄へと変貌をとげていく。それは、黄色の大きな絵を見てみたいという欲求から生まれたのであった。

440×170×145cm（窓8）
木造・コンクリート基礎、ガルバリウム鋼板



7-1-4 《絵画のための見晴らし小屋・妻有》2003



2003年
410×120×370cm（窓5）
コンクリート基礎、木材、ガルバリウム鋼板

2003年、越後妻有アートトリエンナーレにて新潟県川西町の林の中に制作する。

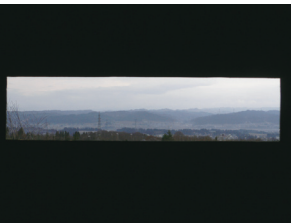
小高い林から東にむけて建てられた小屋のアプローチは、数段の階段を登りにじり口をくぐり小暗室へ、更に室内にも続く階段で方位を変えつつ最上段に座ると、幾つかの窓の断片的風景とともに、正面の横長フォーマットに越後三山、八海山、駒ヶ岳、中ノ岳の山々の稜線がリズムをつくり空とを分けている。しかしその窓には横長フォーマットと抵触する垂直性を示す送電線の鉄塔も取り込まれていて横へのエネルギーを妨げている様にも見える。これはフォーマット決定の過程の中、ここに妻有に於いてそれぞれの集落の文化は山によって、育まれ、守られてきたと考え、積極的に鉄塔と山を同一の窓に対峙的に取り込む事こそが妻有を切り取る事に他ならないとの考えに至っての事であった。

積雪が2mを越す豪雪地帯での雪対策は、鋭い三角の屋根とガルバリウム鋼板による外壁の甲冑にも似た外観を与えた。冬期には一変する色彩の白への変貌に加え、積雪によるGL（グラウンドライン）面の上昇は外観に変化を与え、更に窓の中での光景の地形自体に変化を与えていく事となる。



絵画との相関

— 絵画《M338 TA・TSUMAALI》



《M338 TA・TSUMAALI》
150×800cm（8枚組）
2004年

7-1-5 《絵画のための見晴らし小屋・Hillside》2004



35×112×178cm（窓2）
木材、塗料、ガルバリウム鋼板、可動式（キャスター付き）

られている。そこで見た像・Bildは、会場内に展示された《Tsumari 1》(245×45cm)と相関する。

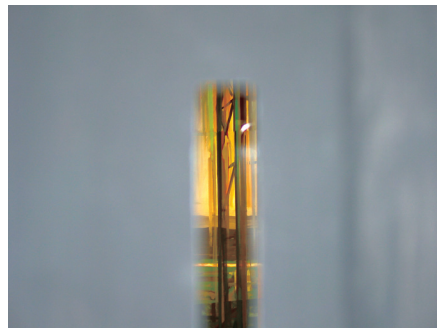
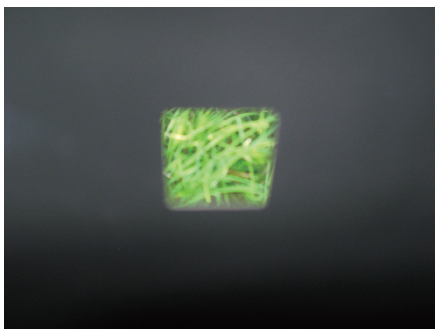
妻有の小屋での像が絵画化され、展示され、それを更にカットアップする小屋が制作され、そこで像が絵画化され、実体を持つ。この絵画と見晴らし小屋の言わば像の循環性を目指したこの展覧会「絵画―見晴らし小屋〈TSUMAALI〉」のこの小屋は、ギャラリーにちなんだ《絵画のための見晴らし小屋・Hillside》と名付けられた。それはキャスターを付け可動性を持ち、ギャラリー外部テラスに設置された。都市空間での初めての試みでもあった。

〈絵画のための見晴らし小屋〉第5作目。絵画のための見晴らし小屋・妻有」の横長の窓をモデルに描かれた《TA・TSUMAALI》150×800cm（8枚組）をギャラリーに展示、その部分をガラス張りの開口部越しに切り取る窓を持った見晴らし小屋。キャスター付き。会期中はギャラリー外部テラスに設置された。

広いガラス張りの開口部を持ったギャラリー内に展示された作品をガラス越しに見るための見晴らし小屋。

前年制作した「《絵画のための見晴らし小屋・妻有》の横長の窓をモデルに描かれた《TA・TSUMAALI》（150×800cm・8枚組）がギャラリーに展示される。それは横長フォーマットと余白と彩色部が繰り返されるTA系の典型を示すものの、画面右側には垂直性＝鉄塔を強調する表現が認められる。

小屋は絵と正対する様に外部に設置され、右斜め窓からは植栽の部分がカットアップされ、正面壁の縦長の窓からは鉄塔部、垂直に走る筆致のみが把握



絵画との相関

一 絵画《M339 Tsumari1》

《M338 TA・TSUMAALI》

《M338 TA・TSUMAALI》
150×800cm（8枚組）
2004年



《M339 Tsumari1》
245×45cm
2004年

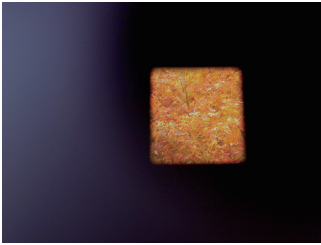
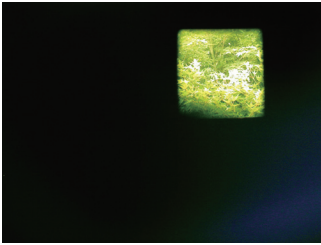
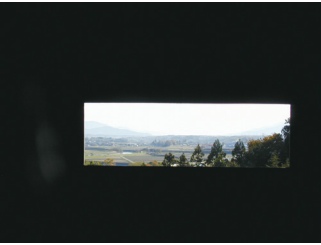


7-1-6 《絵画のための見晴らし小屋・荒神山》 2007



《絵画のための見晴らし小屋》第6作目。
2006年、天竜川上流、南アルプスと中央アルプスに挟まれる伊那谷最北部に位置する辰野でワークショップが催された。
それに際して小高い丘、荒神山の頂に建つ美術館の東側斜面に、正方形と横長の二つの窓を設けた見晴らし小屋を設営した。
正方形の窓が、美術館東に植林されたもみじにむけて開かれ、南側には横長の窓が設けられている。
その横長のフォーマートは、天竜川の流れに導かれ低く保たれた地平線が左右からの山並に圧縮され、上方には空が拡がりを見せ、更にはるか上方に空を背景にアルプスの直線的な稜線が浮かび上がる姿を切り取っている。
梯子の垂直移動によって達する視点場では、小さなのぞき穴の設けられた壁が、それぞれの窓と平行する様に手前に設置され、のぞき穴越しに窓をながめる事で、視点－窓－景観・viewの三点を結び付ける二重壁構造が試みられ、視点の固定の強度が確保された。
制作当初、山の下から吹き上げてくる風は想定されていなかったが、季節によってはかなりの強風も予測され、風対策として、土台脚部を板材で覆う概観となった。

417×157×202cm (窓2・のぞき穴2)
コンクリート基礎、木材、塗料、ガルバリウム鋼板



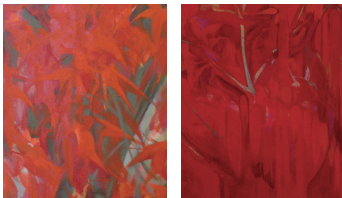
絵画との相関

一絵画 《M362 TA・KOHJINYAMA》《M363 Kohjinyama1》《M364 Kohjinyama2》



《M362 TA・KOHJINYAMA》
160×800cm (10枚組)
2006年

038



《M363 Kohjinyama1》《M364 Kohjinyama2》
45.5×38cm
2006年

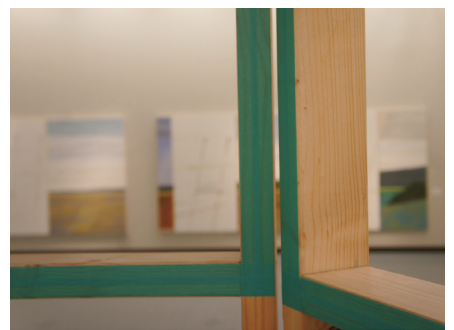
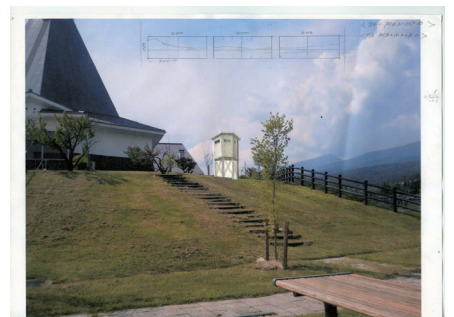
7-1-7 《仮構・絵画のための見晴らし小屋KOMORO》2013



市立小諸高原美術館での個展に際して制作された。先ず浅間山の稜線を捉える〈見晴らし小屋〉が構想された。六角形の塔を特徴とする美術館の東側に開かれたビュールームからは雄大な浅間山がゆっくりと裾野を下ろし市街地へそして再び上方へと続く稜線の風景をのぞむことができる。その水平感に裏付けられ安定感のある盆地の地形と雄大な山の姿を切り取る3面に窓を持つ六角形の〈絵画のための見晴らし小屋〉を構想するものの、構想段階で恒常的設営が困難であることが明らかになり、仮置ききの三面の衝立木枠へと変更、《仮構・絵画のための見晴らし小屋KOMORO》と名づけられた。

定点に仮設置、一年間その折々の季節、天候、様々に変化を示す光景はスケッチ、写真などの取材が重ねられ、絵画《TA・KO MO RO》《TA・ASAM》の制作がすすめられていった。

210×400×175cm
木材、テープ



絵画との相関

- 絵画 《M503 TA・KO MO RO》
- 《M504 TA・KO MO RO 2》
- 《M505 TA・ASAM》

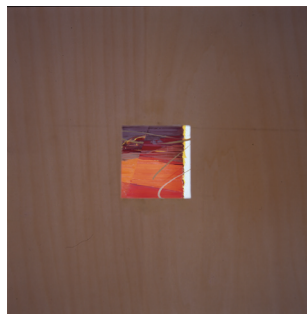


《M503 TA・KO MO RO》
175×1300cm
2014年

7-2 〈絵画のための見晴らし小屋〉系—室内装置—

野外設営に対して、展示会場などで外部の光景や絵画の部分を切り取る《フォーマート／Project 絵画のための見晴らし小屋展》《遮蔽壁／TA・MA UNOU HI 展》などに続き、視点の位置を固定化することで窓の像を限定する視点穴と窓をあわせ待つ構造の《絵画のための見晴らし小屋・MOMAS》などが室内装置として展開される。

7-2-1 《フォーマート／Project 絵画のための見晴らし小屋展》2000



278×80×30cm、(窓6×6cm) 木材、塗料

「Project絵画のための見晴らし小屋 報告展」に際し、窓をカットした仮設壁を会場内に設営、絵画《M286 magino 1》の部分を切り取った。

絵画《M286magino 1》 125×603cm (4枚組)2000年

7-2-2 《遮蔽壁／TA・MA UNOU HI 展》2001



200×38cm、200×15cm、200×50cm、木材、塗料

TA・MA UNOU HI展に際し、画廊開口部に3枚の垂直の板を設営、絵画《TA・MA UNOU HI》の余白部と色面部の反復を開口部の実景と連動させる試み。

絵画《M298 TA・MA UNOU HI II》
280×600cm 2001年



7-2-3 《小暗室／magino fujino》2001



234×91×130cm (窓80×4cm、5×4cm) 木材、塗料

2室の展示室の中間開口部にコの字型三面の壁で閉ざし、正方形と縦長の窓をとおして展示した絵画を切り取る。カットアップされた光景を想定して制作された作品を隣室に展示した。

絵画《M300 mag/fujino 2》62.5×724cm (4枚組) 2001年
《M303 mag/fujino 5》260×25.5cm 2001年



7-2-4 《絵画のための見晴らし小屋・MOMAS》2006



200×90×90cm、木材、塗料 (視点穴1、窓1)

埼玉近美での展示試みに際し、《TA・TSUMAALI》の部分を縦長の窓で切り取る《絵画のための見晴らし小屋・Hilside》の室内用の見晴らし小屋として制作。



絵画《M339 Tsumari 1》
245×45cm 2004年

絵画《M338 TA・TSUMAALI》
150×800cm (8枚組) 2004年



7-2-5 《絵画のための見晴らし小屋・Yoshikawa-kaede》2007

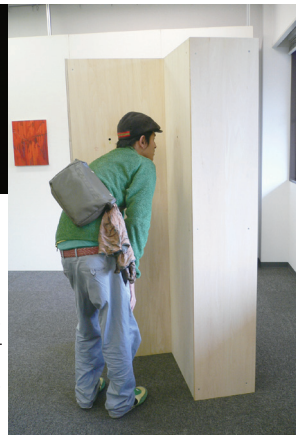
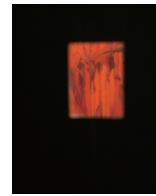


182.5×94.5×93cm、木材
(窓4×3cm、3.4×2.8cm、視点穴2)

青梅、吉川英治記念館展示室、
室内に設置。展示期間中、色
彩を変えていく窓外の楓を切り
取る。



絵画
《M372 Yoshikawa1》
45.5×38cm 2007年
《M373 Yoshikawa-
kaede》
45.5×38cm 2007年

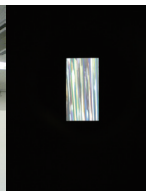
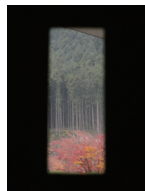


7-2-6 《絵画のための見晴らし小屋・Yoshikawa-sugi》2007



182.5×94.5×93cm、木材
(窓8×3cm、11×5.6cm、視点穴2)

窓外、山肌の杉と展示した縦長作品《Yoshikawa-Sugi》の部分
を切り取る。



絵画
《M371 Yoshikawa-Sugi》
180×75cm 2007年

7-2-7 《絵画のための見晴らし小屋・KYOBASHI I》2008 7-2-8 《絵画のための見晴らし小屋・KYOBASHI II》2008

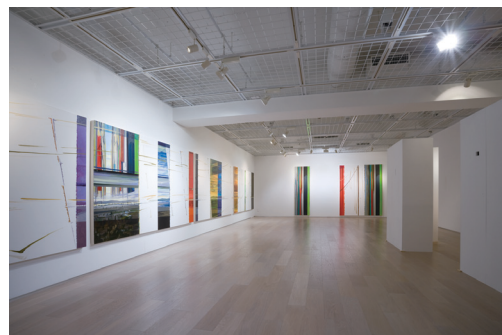
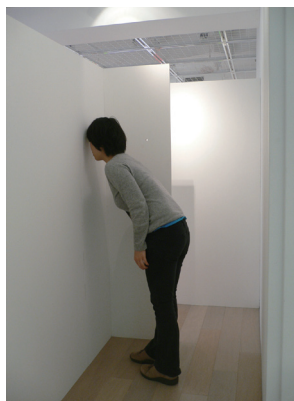


182.5×94.5×91.5cm (窓1、視点穴1) 木材、塗装



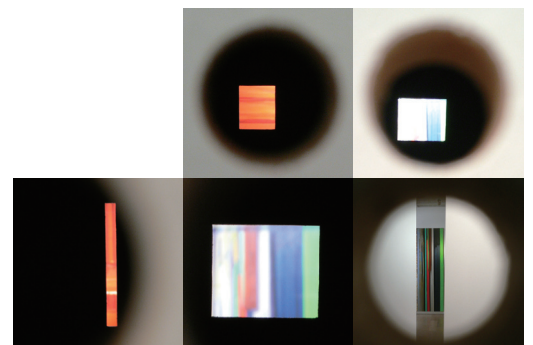
182.5×91.5×323.5cm (窓2、視点穴2)
木材、塗装

京橋INAXギャラリーでの展示。会場入り口に設置、関東平野を想定して描いた10m
超の《TA・KY OB AS HI》のビル群部分を切り取る。その像はビル群の垂直性を描
いた《Kyobashi1》《Kyobashi2》へと循環していく。



絵画《M377 TA・KY OB AS HI》
150×1030cm 2008年

絵画《M378 Kyobashi 1》
200×160cm 2008年



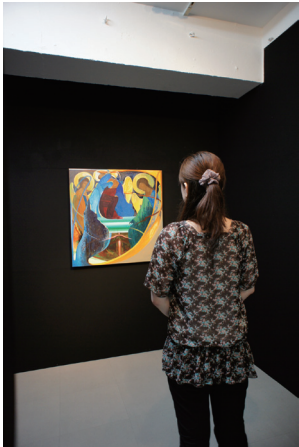
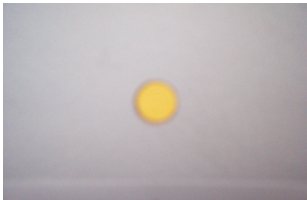
絵画《M379 Kyobashi 2》
200×60cm 2008年

7-2-9 《仮設壁なつか》 2011



276×223×276cm（視点穴1）木材、塗装

大きな壁を設営。「現実とアイデアの二つの世界」を想定、現実世界として黒塗装した小空間に《Qf・SHOH〈掌〉90・Holz》を掲げる。その背には光満ちた房を設け、視点穴から内部の色彩を見る。



絵画《M432 Qf・SHOH〈掌〉90・Holz》
90×40cm
2011年

7-2-10 《小屋・現出の場》 2013（AP 青梅） 2013

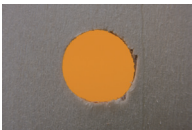


275×275×550cm（視点穴1）木材、塗料

「〈現実の世界（Real）〉と〈もう一つの世界（Idea）〉、この二つの世界はわずかに重なり合っており、この中間領域こそが〈「像」〉の現出する場である。」二つの房を持つ小屋、一つは全壁が黒塗装され《Qf・SHOH〈掌〉90・Holz》が掲げられ、背後の房は視点穴から室内の光を見ることができる。



絵画《M451～492 Himmel Bild1～42》
45.5×53cm
2013年



絵画《M450 Qf・SHOH〈掌〉90・Holz》
90×90cm
2013年

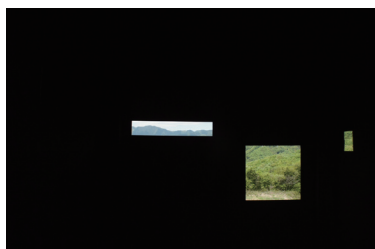
7-3 〈再生プロジェクト・絵画のための見晴らし小屋〉

老朽化がすすんだ〈絵画のための見晴らし小屋〉の修理修繕、改装プロジェクト。2010 年以降すすめている。

7-3-1 《再生プロジェクト・絵画のための見晴らし小屋》1999 / 2010

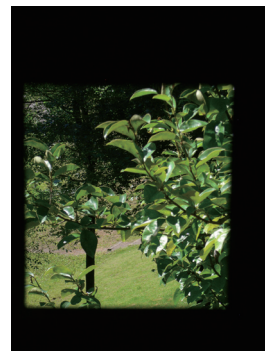


《絵画のための見晴らし小屋》の損傷は、11年の歳月を経て激しかった。特に長年の横風を受け、アプローチは大きく変形、修繕は急務であった。敷地内での移設。変形の激しかったアプローチ部を《絵画のための見晴らし小屋》本体から切り離し、移設にむけて基礎から離脱、暫定的に横置きする。コンクリート基礎工事。垂直階段など大幅な形体の変更。下段からの階段を設ける



7-3-2 《再生プロジェクト・絵画のための見晴らし小屋・芸術の家》2002 / 2010 ~

窓の修繕。階段、踊り場の修繕。



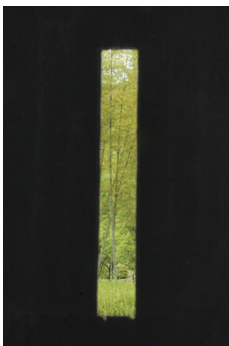
7-4 〈絵画のための垂直箱窓〉

視点穴と窓を持つ直方体作品。風景、野外の光景を切り取る野外設営と室内で外界の光景や室内の部分、展示絵画の部分を取り取る室内設置がある。

7-4-1 《絵画のための垂直箱窓・FUKUSHIMA 1～4》2012



各184×15×33cm、(窓1、視点穴1) 木材、塗装



絵画《M446～449 misogihagi 1～4》
各182×45cm 2013年

僕は、僕らの住むこの“現実な世界”は、まるで写しのようによく似たしかし実体を持たない精神だけの“もう一つの世界”と隣接しているように思うのである。この隣接した二つの世界はほんのわずかに重なり合い隙間を生じさせている。そしてこの隙間、中間領域こそが両義の呼び合いの場、合一の磁場であり、そこに〈像〉、〈絵画〉は現出するのである。

現実から遠いところに現出する“リアリティの世界”は時に絵空事のようにも写ってしまうのであるが、〈ヴェロニカのハンカチ〉がそうであるように背後からの光を受けリテラルな現実の世界に向け、現実を超え言わば生氣論的に光、生命を発するのである。今回、この場FUKUSHIMAで「垂直性」の切り出しと現前化を試みる。「FUKUSHIMAビエンナーレ」で空港公園に設営。

(FUKUSHIMA現代美術ビエンナーレ2012展カタログより)

7-4-2 《絵画のための垂直箱窓・FUKUSHIMA —水平—》2012



184×15×33cm、(窓1、視点穴1) 木材、塗装



7-4-3 《絵画のための垂直箱窓・青梅1〜4》2012

7-4-4 《絵画のための垂直箱窓・青梅ー水平1》2012



各184×15×32.4cm、(窓1、視点穴1) 木材 184×27×28cm、(窓1、視点穴1) 木材

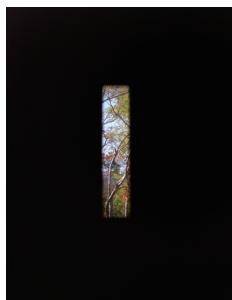
美術館ロビーに設置、窓外の光景を切り取る



7-4-5 《絵画のための垂直箱窓・青梅5》2012



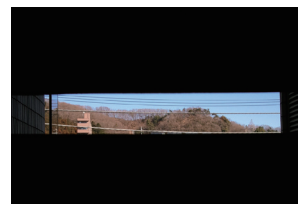
184×15×32.4cm、
(窓1、視点穴1) 木材



7-4-6 《絵画のための垂直箱窓・青梅ー水平2》2012



194×30×30cm、
(窓1、視点穴1) 木材、塗装



7-4-7 《絵画のための垂直箱窓・青梅ーM303・アルカーブ》2012

184×68.5×35cm、(窓2、視点穴1) 木材

二つの縦長の窓で、縦長フォーマット作品《magino/fujino5》とアルカーブの凹部の陰影を切り取る。



- 7-4-8 《絵画のための垂直箱窓・美作1》2016
- 7-4-9 《絵画のための垂直箱窓・美作2》2016
- 7-4-10 《絵画のための垂直箱窓・美作ー水平》2016



各184×15×32.4cm、(窓1、視点穴1) 木材

「美作三湯芸術温度」展参加作品。湯郷温泉のホテル中庭に設営。



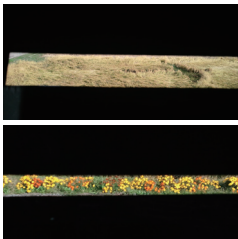
7-5 《絵画のための見晴らしデッキ》 2014

2014 年「FUKUSHIMA ビエンナーレ」出品作。児童が植栽した花と田んぼアートを切り取る〈箱窓〉系作品と磐梯山、空を捉える〈ヤコブの梯子〉系作品の複合デッキ。

- 7-5-1 《絵画のための見下ろし箱窓・FUKUSHIMA 1》(窓 1、視点穴 1) 2014
- 7-5-2 《絵画のための見下ろし箱窓・FUKUSHIMA 2》(窓 1、視点穴 1) 2014
- 7-5-3 《枠窓・ヤコブの梯子》400×40 cm 2014



400×168×385cm 木材、塗料、単管パイプ



7-6 〈ヤコブの梯子〉

梯子状の最上段の枠が空を捉える。黒く塗装された下部には窓が切られ、椅子に腰掛、視点を固定し光景を切り取る。

7-6-1 《ヤコブの梯子・青梅》2015 青梅総合高校敷地内に設置。「アートプログラム青梅」出品作。



530×99×188cm、木材・塗装
(視点穴1、窓2) 2015年

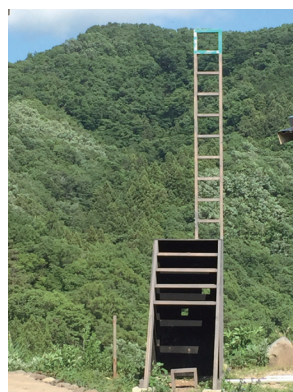
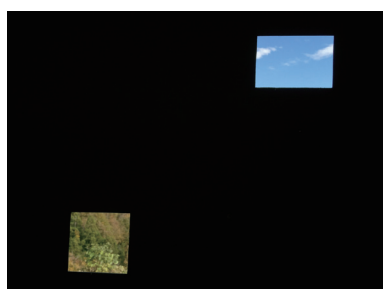


7-6-2 《ヤコブの梯子・藤野》2015

《ヤコブの梯子・青梅》と同時期に同型同サイズの〈ヤコブの梯子〉を藤野に設営。



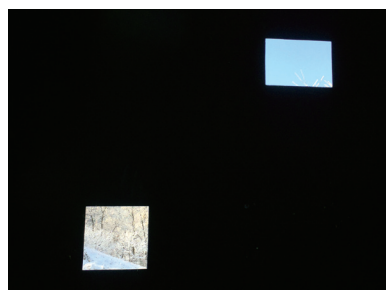
530×99×188cm、木材・塗装
(視点穴1、窓2) 2015年



7-6-3 《ヤコブの梯子・藤野 やまなみ》2016



51×99×186cm 木材、塗装 コンクリート
2015



藤野で2016年に制作設営されていた《ヤコブの梯子・藤野》は、2017年1月にやまなみ公園に移設。名前も《ヤコブの梯子・藤野 やまなみ》に変更、最上段の枠で空を、下段の二つ窓は南西方向の峰山を切り取るようになった。

7-7 〈箱窓〉

当初は完成された絵画作品の部分をカットアップ撮影する目的で2000年に第一作目が制作された。その後、埼玉近美での特集展示では収蔵作品の部分を切り取るための視点穴と窓を持つ小型の箱窓、更に〈絵画のための垂直箱窓〉へと展開する。また須田剋太《作品1979a》の部分をステラ《My Curves are not Mad》のシェーブでそして《M338 TA・TSUMAALI》の部分を切り取る箱窓。

7-7-1 《箱窓》2000



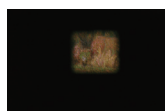
完成された絵画作品の部分をカットアップ撮影する目的で2000年に制作。

33×22.5×4.6cm 窓6×6cm 紙

7-7-2 《箱窓・モネ／白羊》2006

38.4×33×27cm (窓1、視点穴2) MDFパネル、塗装、カッティングシート

モネ《積みわら》と倉田白洋《房州風景》の部分を切り取る。

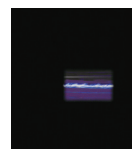


絵画 モネ《ジヴェルニーの積みわら・夕日》65×92cm 1888-89年
倉田白洋《房州風景》41.2×53.2cm 1918年

7-7-3 《箱窓・水平／全面》2006

38.4×27×27cm (窓2、視点穴2) MDFパネル、塗装、カッティングシート

《TA・TSUMAALI》の水平部の部分と須田剋太《作品1979a》の部分をセラ作品《My Curves are not Mad》のシェーブで切り取る箱窓。



絵画
須田剋太《作品1979a》
130×97cm 1979年
R・セラ《My Curves are not Mad》
128×195cm 1987年

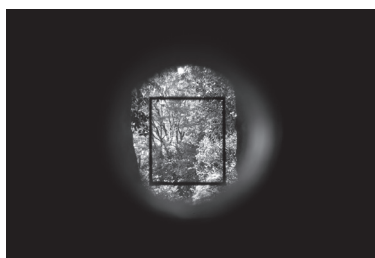
7-8 〈視点板+膜窓〉

視点穴を開けた〈視点板〉とガラス面にテープによるフレームを施す〈膜窓〉によって視点の固定化と対象の限定化を図った作品。

7-8-1 《視点板+膜窓・Yoshikawa 1～4》2007

木材（視点h137.5cm、135cm、145cm、125cm）

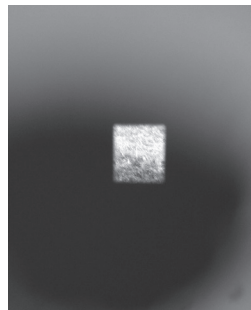
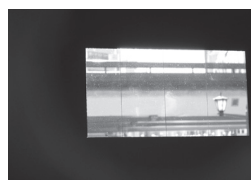
吉川英治記念館のロビーから日本庭園を視点の高さを変え切りとる。



7-8-2 《視点板+膜窓・Kyobashi 1～3》2008

カッティングシート、木材、塗装

京橋の高速道路、ビル群をカッティングシートで切り取った〈膜窓〉の手前に視点板を設置。



7-9 〈膜窓〉

ガラス面にテープ、シートによって貼り込み矩形を作る作品。

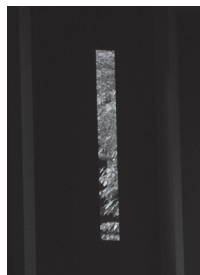
7-9-1 《膜窓・正方形— MOMAS 》



カットティングシート（乳白・半透明）90×234cm（窓1）2006年

埼玉近美のロビーガラス面にカットティングシートを貼り正方形の窓を開ける。

7-9-2 《膜窓・垂直— MOMAS 》



カットティングシート（黒）280×110cm（窓1）、280×103cm（窓2）2006年

埼玉近美のロビーガラス面にカットティングシート（黒）を貼り複数の矩形の窓を開ける。

7-9-3 《ガラスケース膜窓・御舟：恒友— 掛け軸 》



カットティングシート（イエロー・グレー）197×700cm（作品窓1、のぞき窓1）2006年

速水御舟、森田恒友の掛け軸をカットティングシートでカットしたガラスケース越しに作品の部分を切り取る。

絵画 速水御舟《夏の丹波路》

7-9-4 《ガラスケース膜窓・雅邦— 屏風 》

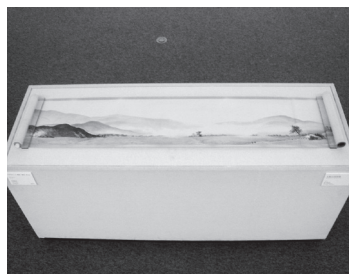


カットティングシート（イエロー・グレー）197×700cm（作品窓1、のぞき窓3）2006年

橋本雅邦の屏風の部分を切り取る。

絵画 橋本雅邦《花鳥図》

7-9-5 《のぞきケース膜窓・雅邦— Waage 》



テープ（黒）180cm 2006年

橋本雅邦の巻物ケースにテープによって水平性を示唆。

絵画 橋本雅邦《大和山水図巻》

7-9-6 《膜窓・アートラボはしもと》



テープ（緑）2012年

アートラボはしもとのガラス面に緑、白の2色の矩形をテーピング、外景を切り取る。

7-9-7 《膜窓・青梅》



テープ（緑）2012年

美術館ロビーガラス面に矩形にテーピング、窓外の光景を切り取る。

7-9-8 《膜窓・藤野アトリエ》



テープ（緑）60×19cm 2012年

アトリエ東側窓に縦長矩形をテーピング。

7-9-9 《膜窓・FUKUSHIMA1～12》



テープ（緑）2014年

展示会場、道の駅レストランの窓面に膜窓設営。

7-9-10 《膜窓・小諸1～3》2016



テープ（緑）2016年

美術館東側のビュールームガラス面にテーピング。

7-9-11 《膜窓・BC》



テープ（緑）2016年
ギャラリーの窓から外
景を切りとる。

7-9-12 《膜窓・MSK》



テープ（緑）15個 2016年

ホテルロビーガラス面に膜窓を施し、庭園の部分を取りとる。

7-10 〈枠窓〉〈柱窓〉

〈枠窓〉は、木製の矩形の枠を吊るす作品。〈柱窓〉は、垂直軸と水平軸の木で矩形をつくる作品。

7-10-1 《枠窓・柱窓 アートラボはしもと》



木材、テープ（緑）2012年
アートラボはしもとで
の「風・景・観」展で
インスタレーション設
営。

7-10-2 《枠窓・藤野アトリエ》



木材、塗装 34×44cm 2013年
アトリエ東側の林に設営、定点
観察する。

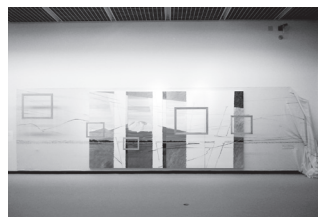
7-10-3 《枠窓・小諸1～6》



木材、木製枠 2014年

《壁画ドローイングKOMORO》230×1400cmの前面に6つの〈枠窓〉を設置。

7-10-4 《枠窓・青梅1～5》



木材、木製枠 2014年

《壁画ドローイングKOMORO》の上面に《TA・ASAM》200×400cmを展示、その前面に5つの〈枠窓〉を設置。

7-11 〈絵画のための見晴らしフレーム〉

携帯用の絵画のための見晴らしフレーム。

7-11-1 《絵画のための見晴らしフレーム》



紙、8.5×5.7cm、窓1.8×1.8cm、5.6×0.7cm、2.2×1.5cm
図版4ページ、ケース
エディション100
2003年

7-11-2 《絵画のための見晴らしフレーム》



プラスチック、8.5×4.9cm
窓6.9×0.8cm、2×2cm
2004年



8. 〈絵画のための見晴らし小屋〉系全作（時系列）

1999	2011
・《絵画のための見晴らし小屋》1999	・《仮設壁なつか》2011
2000	2012
・《フォーマート／Project絵画のための見晴らし小屋展》2000	・《膜窓・藤野アトリエ》2012
・《箱窓》2000	・《膜窓・青梅》2012
2001	・《絵画のための垂直箱窓・FUKUSHIMA 1》2012
・《遮蔽壁／TA・MA UNOU HI展》2001	・《絵画のための垂直箱窓・FUKUSHIMA 2》2012
・《小暗室／magio fujino》2001	・《絵画のための垂直箱窓・FUKUSHIMA 3》2012
2002	・《絵画のための垂直箱窓・FUKUSHIMA 4》2012
・《絵画のための見晴らし小屋・bei Atelier》2002	・《絵画のための垂直箱窓・FUKUSHIMA－水平》2012
・《絵画のための見晴らし小屋・芸術の家》2002	・《膜窓 アートラボはしもと1～12》2012
2003	・《枠窓・柱窓 アートラボはしもと》2012
・《絵画のための見晴らし小屋・妻有》2003	・《絵画のための垂直箱窓・青梅1》2012
・《見晴らしフレーム》2003	・《絵画のための垂直箱窓・青梅2》2012
2004	・《絵画のための垂直箱窓・青梅3》2012
・《絵画のための見晴らし小屋・Hilside》2004	・《絵画のための垂直箱窓・青梅4》2012
・《見晴らしフレーム》2004	・《絵画のための垂直箱窓・青梅5》2012
2006	・《絵画のための垂直箱窓・青梅－水平1》2012
・《絵画のための見晴らし小屋・MOMAS》2006	・《絵画のための垂直箱窓・青梅－水平2》2012
・《箱窓・モネ／白羊》2006	・《絵画のための垂直箱窓・青梅－M303・アルカーブ》2012
・《箱窓・水平／全面》2006	2013
・《膜窓・正方形－MOMAS》2006	・《枠窓・藤野アトリエ》2013
・《膜窓・垂直－MOMAS》2006	・《仮構・絵画のための見晴らし小屋KOMORO》2013
・《ガラスケース膜窓・御舟：恒友－掛け軸》2006	・《小屋・現出の場》2013 (AP青梅)
・《ガラスケース膜窓・雅邦－屏風》2006	2014
・《のぞきケース膜窓・雅邦－Waage》2006	・《絵画のための見晴らしデッキ》2014
2007	・《絵画のための見下ろし箱窓・FUKUSHIMA 1》2014
・《絵画のための見晴らし小屋・荒神山》2007	・《絵画のための見下ろし箱窓・FUKUSHIMA 2》2014
・《絵画のための見晴らし小屋・Yoshikawa-kaede》	・《枠窓・ヤコブの梯子》2014
・《絵画のための見晴らし小屋・Yoshikawa-sugi》	・《枠窓・磐梯山》2014
・《視点板・Yoshikawa》2007	・《膜窓・FUKUSHIMA1～12》2014
2008	・《膜窓・小諸1～3》2014
・《絵画のための見晴らし小屋・KYOBASHI I》2008	・《枠窓・小諸1～6》2014
・《絵画のための見晴らし小屋・KYOBASHI II》2008	・《枠窓・青梅1～5》2014
・《視点板・Kyobashi》2008	2015
2010	・《ヤコブの梯子・青梅》2015
・《再生プロジェクト・絵画のための見晴らし小屋》1999／2010	・《ヤコブの梯子・藤野》2015
・《再生プロジェクト・絵画のための見晴らし小屋・芸術の家》2002／2010～	・《膜窓・BC》2015
	2016
	・《絵画のための垂直箱窓・美作1》2016
	・《絵画のための垂直箱窓・美作2》2016
	・《絵画のための垂直箱窓・美作－水平》2016
	・《膜窓・MSK 1～15》2016
	・《ヤコブの梯子・藤野 やまなみ》2016

9. 略歴

■ 歴母袋俊也

- 1954 長野県生まれ
1978 東京造形大学美術学科絵画専攻卒業
1983 フランクフルト美術大学／シュテューデルシュレー R・ヨヒムス教授に学ぶ。(～'87帰国)
1986～ 複数パネル絵画様式の展開
1988～ 立川にアトリエを定め、制作を始める。戸外でのスケッチの再開
1992 論文「絵画における信仰性とフォーマットー偶数性と奇数性をめぐって」執筆
1995 アトリエを立川から藤野に移す。偶数パネル作品をTA系と命名する。
1996 奇数パネルでの制作
1999～ 野外作品「絵画のための見晴らし小屋」制作
2000～ 東京造形大学教授
2001～ Qf (正方形フォーマット) 系の展開
2013～ 「Himmel Bid」シリーズの開始

■ 個展・特集展示

- 1979 真和画廊／東京 p.
1980 真和画廊／東京 p.
1981 シロタ画廊／東京 p.
1984 ギャラリーヴィレムス／フランクフルト d.
1985 シュテューデルシュレー／フランクフルト d.
ギャラリーヴィーゼンマイヤー／ヴァイルブルク d.
1987 ボン文化センター／ボン p.w.
ギャラリーブルマン／フランクフルト p.w.
JAL ギャラリー／フランクフルト w.
1990 「母袋俊也 絵画・水彩」ストライプハウス美術館／東京 p.w.
1991 「オマーージュ 1906水彩」apt ギャラワー／東京 w.
「平面・余白・モダニズム」ギャラリー αM／東宮 p.
1992 「from Figure」apt ギャラリー／東京 p.
「素描1001葉のf・Zより」ギャラリー TAGA／東京 d.
「リトグラフーLe Ballet」ギャラリー福山／東京 l.
1993 「paper-foldscreens 開かれる翼」
ギャラリエアンドウ／東京 w.
「Koiga-Kubo」ギャラリーなつか／東京 p.
1994 「from Figure」ギャラリー TAGA／東京 p.
「from Plant」apt ギャラリー／東京 p.
ギャラリエアンドウ／東京 p.d.w.
1995 「Hossawa」ギャラリーなつか／東京 p.
「Waage・TA」かわさき IBM 市民文化ギャラリー／神奈川 p.
1996 「Wien」ギャラリー TAGA／東京 p.
「Stephan II」ギャラリエアンドウ／東京 p.
「TAAT-NA・KA・OH」ギャラリーなつか／東京 p.
1997 「母袋俊也 TAaT」ガレリアラセン／東京 p.
「母袋俊也 TAa/Nakaoh」ギャラリー ル・デコ／東京 p.
「母袋俊也 Printworks」ギャラリエアンドウ／東京 l.mt.
「母袋俊也 TAaT」ギャラリー You／京都 p.
1998 「母袋俊也 NA・KA・OH II」ギャラリー TAGA／東京 p.
「MOTAI Gemälde・Papierarbeiten」
ライン・ルーア・クンストアカデミー／エッセン p.w.mt.
1999 「母袋俊也 ta・KK・ei-TA・ENTJI」ギャラリーなつか／東京 p.d.
「母袋俊也 ドローイングインスタレーション ta・KK・ei」ギャラリエアンドウ／東京 d.
2000 「母袋俊也 ARTH・UR・S・SE・ATAR」ギャラリー TAGA／東京 p.
「母袋俊也 Project 絵画のための見晴らし小屋」ギャラリー毛利／東京 d.p.s.
2001 「母袋俊也 TA・MA UNOU HI」エキジビション・スぺー

- ス／東京 p.
「母袋俊也 mag/fujino」ギャラリーなつか／東京 p.
「母袋俊也 Quadrat/full」ギャラリエアンドウ／東京 p.
2003 「母袋俊也 TA・SHOH-Qf・SHOH《掌》」ギャラリーなつか／東京 p.
2004 「母袋俊也 絵画ー見晴らし小屋 TSUMAALI」アートフロントギャラリー／東京 p.pc.
2005 「母袋俊也 Qf・SHOH 150《掌》」ギャラリーなつか／東京 p.w.
「母袋俊也《Qf》その源泉」エキジビション・スペース／東京 p.w.mt.d.
2006 「風景・窓・絵画 アーティストの視点から：母袋俊也の試み」埼玉県立近代美術館 (常設展特別展示) p.pc.
2007 「母袋俊也 TA・KOHJINYAMA」ギャラリーなつか／東京 p.d.
「母袋俊也く絵画のための見晴らし小屋」水平性の絵画＜TA＞の流れ」辰野美術館／長野 p.w.pc.
2008 「母袋俊也 窓ー像 KY OB AS HI」INAX ギャラリー／東京 p.pc.
2009 「母袋俊也 Qf・SHOH《掌》90・Holz /145」ギャラリーなつか／東京 p.d.w.
2010 「母袋俊也 TA・TARO」夢の庭画廊／上田／長野 p.
2011 「母袋俊也 Qf・SHOH《掌》90・Holz 現出の場ー浮かぶ像ー膜状性」ギャラリーなつか／東京 p.d.w. d.
2012ー2013 「コレクション×フォーマットの画.家母袋俊也 世界の切り取り方ー縦長か横長か、それが問題だ」青梅市立美術館 p.pc.
2014 「母袋俊也 Qf SHOH《掌》90・Holz 2009ー2014」ギャラリーなつか／東京 p.d.w.
「母袋俊也 Himmel Bild」ギャラリー TAGA／東京 p
「母袋俊也 絵画《TA・KO MO RO》ー《仮構・絵画のための見晴らし小屋 KOMORO》」市立小諸高原美術館／長野 p.pc. d.w.
2015 「母袋俊也「空の絵」《ヤコブの梯子・藤野》《Himmel Bild》BC工房ふじのリビングアート／神奈川 p.pc.
2016 「母袋俊也 Printworks ポートフォリオ《現出の場》モノタイプ《mt 21「もう一つの世界」に回り込んで》」ギャラリー TAGA／東京 mt.ij.
「Toshiya Motai Painting Paper Works」Galerie E'terna パリ p.mt.

p:painting
d:drawing
w:water color
l:lithograph
s:slide
pc:prospect cottage
mt:monotype
ij:inkjet

■ グループ展 (1997年以降 抜粋)

- 1997 「'97 大邸アジア美術展」大邸文化芸術会館／韓国
1998 「神奈川アートアニュアル」神奈川県民ホールギャラリー／神奈川
「川村龍俊コレクション展」東京純心女子大学純心ギャラリー／東京
1999 「第2回 Fujino 国際アートシンポジウム '99」藤野／神奈川
「SSA・アニュアル展」ロイヤル スコティッシュ アカデミー／エジンバラ、スコットランド
「Artists+Itazu Litho-Grafik展」文房堂ギャラリー／東京
2000 「トルコ支援 日本現代美術展ーこころのパナー」デルメンデレ芸術の家／デルメンデレ、トルコ
2002 「こころのパン 2002 絵画・彫刻」イズミット市立美術

館他5都市巡回/トルコ
2003 「中川久・母袋俊也」かわさきIBM市民文化ギャラリー/神奈川県
「第2回大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2003」新潟
「代官山アートフェア」ヒルサイドフォーラム/東京
2005 「郷土ゆかりの作家たちⅡ」新見市美術館/岡山
2006 「第3回大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2006」新潟
「＜絵画＞はく絵画＞を超えて」ギャラリーなつか/東京
2007 「Fuse /Fureru」東京造形大学美術館/東京、京都造形大学 ギャラリーオープン/京都
アートプログラム青梅2007－出会いのよりしろ」吉川英治記念館・青梅/東京
2008 「Harvest 原健と160人の仕事」銀座東和ギャラリー/東京・東京造形大学 ZOKEI ギャラリー/東京
「Fuse /Fureru」SENON ART GALLERY at USSC /UC サンタクルーズ、USA
「アートプログラム青梅 2008－空気遠近法 U・39」
「ワークショップ報告展 風景 画 うまれるとき」青梅市立美術館/東京
「ポリフォニー Bild 画 うまれるとき」吉川英治記念館/東京
「板津版画工房と作家たち」調布文化会館/東京
2009 「第4回大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2009」新潟
「アートプログラム青梅 2009 空間の身振り」BOX KI-O-KU (旧都立繊維試験場)/東京
2010 「アートプログラム青梅 2010 循環の体」青梅市立美術館/東京
「SO + ZO 未来をひらく 造形の過去と現在1960s →」Bunkamura ザ・ミュージアム/東京 桑沢デザイン研究所 1 F/東京
2011 「アートプログラム青梅 2011 山川の間で」青梅市立美術館/東京
2012 「新生2012 Vol.1」ギャラリーなつか/東京
「風・景・観 見逃した世界・ここにある世界」アートラボはしもと/東京
「第5回大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2012」新潟
「アートプログラム青梅 2012 存在を超えて」青梅市立美術館/東京
「福島現代美術ビエンナーレ2012 SORA」福島空港/福島
2013 「色彩の力」ギャラリエアンドウ/東京
「アートプログラム青梅 2013 雲をつかむ作品たち」サクラファクトリー/東京
2014 「見る事・描くこと－油画技法材料研究室とその周縁の作家たち」東京藝術大学大学美術館、陳列館/東京
「福島現代美術ビエンナーレ2014」喜多方市美術館、湯川村道の駅/福島
「アートプログラム青梅 2014 まなざしを織る」青梅市立美術館/東京
2015 「第6回大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2015」新潟
「アートプログラム青梅 2015 感性を開く――一人ができること」青梅総合高校/東京
2016 「美作三湯芸術温度」湯郷/岡山

■研究論文

1990 「母袋俊也Hommage 1906」東京造形大学雑誌6B (p.65～74)
1994 「母袋俊也Painting 1989－1993」東京造形大学雑誌8B (p.37～48)
1996 「母袋俊也Painting 1993－1995」東京造形大学雑誌9B (p.39～48)

1998 「母袋俊也Painting 1996－1997」東京造形大学雑誌10B (p.35～44)
2000 「母袋俊也 絵画 フォーマットPainting 1989－1999」東京造形大学研究報2000 (p.35～68)
2005 「母袋俊也 絵画のための見晴らし小屋 1999－2004」東京造形大学研究報6 (p.65～97)
2007 「風景・窓・絵画－アーティストの視点から：母袋俊也の試み」東京造形大学研究報8 (p.17～71)
2011 「母袋俊也「絵画 マトリックス 1987－2010 M1-M431」東京造形大学研究報12 (p.89～180)
2014 母袋俊也 記録「コレクション×フォーマットの画家母袋俊也 世界の切り取り方－縦長か横長かそれが問題だ」東京造形大学研究報15 (p.44～109)
2016 「母袋俊也 絵画《TA・KO MO RO》《仮構・絵画のための見晴らし小屋KOMORO》－仮想の見晴らし小屋から浅間を切り取る－」東京造形大学研究報17 (p.5～59)

■論文・書評

1992 「絵画における信仰性とフォーマット」東京造形大学雑誌A7 (p.71～93)
1996 試論・成田克彦「造形学研究14 「成田克彦研究」(p.41～51)
1998 「シュタイナーの色彩理論における実践と今日性」(書評)
(E・コッホ『色彩のファンタジーR・シュタイナーの芸術論に基づく絵画実践』松浦賢訳・イザラ書房 モルフォロギア20号 ゲーテと自然科学 (p.120～121)
2003 「絵画史への旅－ゲーテの「イタリア紀行を携えて」－(書評) (「ゲーテと歩くイタリア美術紀行」高木昌史 編訳・青土社) モルフォロギア25号 ゲーテと自然科学 (p.158～159)
2005 「実作者による色彩試論－絵画の内側からみたゲーテ色彩論」モルフォロギア27号 ゲーテと自然科学 (p.37～65)
2009 「生を喚起するモルフェーの照射『かたちの詩学1・2』」－(書評) (「かたちの詩学1・2」向井周太郎 著・中公文庫)
2013 「クレーの造形宇宙をととして現前する『色彩のオーバーラップ』」－(書評)
(「パウル・クレー 造形の宇宙」前田富士男著、慶応義塾大学出版社)
『モルフォロギア』35号 ゲーテと自然科学 (p.130～133)
2014 「《像》の芸術としての絵画とゲーテ色彩論」
『モルフォロギア』36号 ゲーテと自然科学 (p.47～74)